

→猪名寺麿寺と法道上人空鉢伝説の謎

2020.7.12（日）カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第557回（JR559回）参加報告

■弥生時代の住居

午後は、猪名川右岸の堤防を少し下り猪名川橋を渡った左岸堤防沿いの、田能遺跡公園と田能資料館の見学からであった。

復元整備されている、弥生時代の日本人が暮らしていた「円形平地式住居」の中に入った。少しひんやりとした空間、20帖ほどの広さ。厚さ50センチほどのカヤ葺きで夏の暑さも、雨風も冬の寒さもしのいでいたのだ。中央の、周りを土で盛り上げて作った炉を囲み団らんの暮らしぶりを想像していると、2400年以上も前の人々に親しみも湧いてくるものだ。

■田能資料館の誕生。

今回の参加者は50人ほどであったが、田能資料館は入館者を10人ずつにする措置が執られた。そのお陰か、余裕を持って見学できたように思う。「禍転じて福となす」である。

昭和40年工業用水の配水建設工事現場から弥生式土器が発見された。今日のように工事を止めることがかなわない事情の中、調査は全国から多くの若い考古学調査員の手で暑さ寒さをいとわず、一心

に進められたのだ。そして、懸命に働く彼らをじっと見つめる市民が彼らの姿に心打たれ、差し入れや炊き出しで支援した。その支援は、遺跡の保存運動へと広がり、出土地域は保存されることになり、昭和44年6月国の史跡に指定にされた。そして翌年、田能資料館が誕生したのだ。

何と、あたたかくて熱い話ではないだろうか！

なお、2020年9月27日（日）までは、企画展「弥生時代の暮らし」が開催されている。



田能資料館前

■最後の訪問先・覚園寺

猪名川を渡り直し、中州の旧家が立ち並ぶ地区に浄土真宗の寺院があった。先代ご住職が、お寺の沿革などをお話下さった。メモに時折目を落としながら、ゆっくりとした口調。

老師の言葉と言葉の間合いに、自分の知っている歴史を重ね合わせながら、印象深く聞き入った次第だ。

浄土真宗のお寺さんの法話を聞くことがあるのだが、その口調は流暢^{りゅうちやう}だが、終われば

よく「何の話やった？」となる。老師の話はよく覚えてはいないが、荒木村重が登場していたので、戦国時代を巧みに生き延びた彼の生涯に思いを巡らながら拝聴した。

■今月のテキスト・町田康訳『宇治拾遺物語』から

横井先生が覚圓寺さんの話の後、町田康訳『宇治拾遺物語』の第34話「藤大納言忠家物言ふ女放屁の事」を読んで下さった。

恋ごとの最中に、あり得ることかもしれないが、こんなこと取り上げるか？……という「思いがけないこと」が平安朝のある貴公子に起こった。彼は相手に辱められたと出家を決意した。が、これしきのことで、今まで積み重ねてきたものを捨てるって……。そんなこと、おかしいでしょう。とんでもないことをするところだった、と平常心を回復するお話。

平成12年の芥川賞作家・町田康の大阪人ならではのこの話の現代語名は「藤大納言が女に屁をこかれた」だから、本文の訳は推して知るべし。軽妙なタッチで漫談風におもしろおかしく、訳しているのだが、この朗読を聞いて、特に女性の間からクスクス、クスクス。

ということで、今回も肩のこらない楽しい文学散歩であったと、笑顔のうちに解散となった。時に14時。

(報告／2020/07/23：石元英雄)



道中春日神社にて休憩



尼崎市立農業公園のヒマワリ